

タイトル	アイヌ民族クジラ利用文化の足跡をたどる
著者	岩崎, まさみ
引用	北海学園大学人文論集, 21: 111-146
発行日	2002-03-31

アイヌ民族クジラ利用文化の足跡をたどる¹

岩 崎 まさみ

はじめに

北海道沿岸を回遊するクジラを食料資源としてきたアイヌ民族は、北海道の各地域にクジラとの深いつながりやを印す多様な足跡を残してきた。これらの跡をたどっていくと、自然の恩恵によって与えられる食料資源を利用し、その恵みを神に感謝するアイヌ民族の先祖達の姿が見えてくる。これらの先人達がクジラを利用したという記録は様々な文献に残されている。しかしそれらのほとんどが断片的な記述であり、さらに実際にクジラを利用した経験を持つアイヌ古老達も数少なくなってしまった。ゆえに今後、アイヌ民族のクジラ利用文化の全貌を知るには個々の断片的な情報を張り合わせて行く長期的な作業が必要である。本論文では、その試みの始めとして、筆者が数年らい収集してきたアイヌ民族とクジラに関わる資料を提示し、将来の研究の足がかりとしたい。今後多くの研究者がそれらの研究成果を積重ね、将来においてアイヌ民族クジラ利用文化史の研究の完成を目指すものである。

アイヌ民族クジラ利用文化を理解するには社会・文化などの多方面からの検証が必要であり、現段階でそれらの全てを充足させることは困難である。

1 これまでに筆者は野本正博(アイヌ博物館)、藤島法仁(鹿児島大学大学院)と共著でアイヌとクジラに関わりに関するエッセー(2000)、小論文等(1999, 2000)を発表している。本論文はこれまで枚数の制限等により書ききれなかった資料、その後の聞き取り資料、さらに最近の調査結果をまとめたものである。

るが、不十分ながらもこれまで収集された資料にもとずき、本論文ではアイヌ民族クジラ利用文化を大きく7つの分野に別けて検証する：1) アイヌ民族クジラ利用文化に関する研究，2) クジラにまつわるアイヌ語地名，2) クジラ利用文化の歴史的記録，3) アイヌ捕鯨と寄りクジラ利用，4) アイヌ民族によるクジラ利用方法，5) クジラとアイヌの精神世界，6) アイヌ語や民話，踊りにあわられるクジラとの関わり，7) クジラ利用文化の現代的意味。

アイヌ民族クジラ利用文化に関する研究

アイヌ捕鯨に関する論文として最も知られているのが名取武光の「北海道噴火湾のアイヌ捕鯨」(1940, 1974)である。アイヌ民族による捕鯨をこれほど詳細に記述した論文は他には無いことから、アイヌとクジラの伝統的関わりを理解する上で最も貴重な論文とされている。1969年にアイヌ文化保存対策協議会がそれまでのアイヌ研究の集大成として『アイヌ民族誌』を出版しているが、その中でアイヌ民族による捕鯨についての説明として名取の同論文を要約したものを紹介している(1969: 356-361)。このことから、アイヌ民族による捕鯨の詳細な記述は名取の「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」が唯一と考えられる。名取はこの論文の中で捕鯨経験のあるアイヌ古老の聞き取りをもとに、トリカブトの毒を塗った離頭鉈を用いてアイヌの人々がクジラを捕った様子を紹介している。その詳細については、本論文の中で各分野ごとに紹介するが、興味深いことに、この論文の冒頭で名取は金石併用時代にオホーツク海岸で捕鯨に類似した漁法が行われていたと記述している。名取は根室で発掘された針入れに描かれていた捕鯨と見られる絵(本論文7頁参照)を指しているものと考えられるが、この点に関する議論は深められておらず、実際にオホーツク海岸で離頭鉈を用いた捕鯨が行われたのか、それはどのような人々であったのかに関してはさらなる研究が待たれる。

名取武光のほかに、アイヌ民族とクジラの関わりを書いているのが更科

源蔵であり、『コタン生物記II』（1976）では7ページに渡り、北海道各地のクジラ捕獲の方法や寄りクジラ利用、さらにクジラにまつわる地名や伝説、踊りに関する記述をのこしている。更科はアイヌのクジラ捕獲を大きく3つに分け、名取が紹介している離頭鉈を用いた噴火湾地域の捕鯨に加えて、トリカブトを槍の先に塗る方法、さらに寄りクジラ・流れクジラの利用をあげている（詳細は本論文12-18頁参照）。更科源蔵はアイヌ民族によるクジラ利用に関する記述を多く残しているものの、名取のように独立した論文としては出版していないのが残念である。しかし更科が昭和初期に行った聞き取り調査の際に残した自筆の調査ノート（1951-1965）には、その当時のアイヌ古老達から聞いたなまの記録が多く残され、アイヌ民族がクジラをどのように捕獲し、また利用していたかを知る貴重な資料である。名取と更科の研究はアイヌ民族によるクジラ利用文化研究の基礎文献として重要であり、その後続く出版物に広く引用されている。

昭和の終りから平成にかけて北海道教育委員会が出版した聞き取り調査の報告書（1981-1998）には、その当時のアイヌの人々が記憶するアイヌ民族の生活の様子が記録されている。これらの報告書は地域ごと、さらに生活に関わる各分野ごとに分類されていることから、体系化された民族誌というよりは、項目ごとの聞き取り記録であり、北海道各地のアイヌの人々の言葉が生き生きと残されている。その中に、クジラ利用に関わる記録も多くみられるが、この頃のアイヌの人々の記憶には、積極的に海へ出て行く捕鯨の話は出てこない。しかし寄りクジラを利用した数々の体験が記録されていることから、これらの人々の記憶にクジラ利用文化が生きていることが解る。

名取と更科の研究から長いブランクの後、1990年代に入り、渡部(1992, 1993, 1994 a, 1994 b, 1995)が近世アイヌ民族史料を中心とした歴史的資料にあらわれる海獣狩猟を検討し、「アイヌの海獣狩猟」を初めとする一連の論文にまとめている。渡部はアイヌの海獣狩猟をより広いコンテキストで捉ようとし、北東アジアの少数民族の狩猟との比較を試みている。これらの論文の中で渡部は上記の噴火湾アイヌの捕鯨を「偶発的な捕鯨」とし、

かなりはやい時期に捕鯨の伝統は失われていたのではないかとしている。しかしクジラ利用文化は継承され、北海道の各地域では寄りクジラ・流れクジラを食料と利用するのみならず、交易品としてまた日用品として利用されてきたことを明らかにしている。その後秋道(1994)は渡部の議論をさらに展開し、捕鯨であろうが寄りクジラであろうが「偶発性」が高かったゆえに衝撃的なできごとであっただろうとしている。秋道はさらにクジラ、イルカ、シャチなどの海獣を利用する文化は縄文時代から存在し、これらの骨を儀礼に用いる習慣は縄文時代、オホーツク文化、近世アイヌとつながる可能性がある事を示唆している。

最近の論文としては、著者と野本(1999)、及び藤島を加えた3者(2000)が書いた論文があるが、これらの論文はこれまでの論文とは異なり、現代に生きるアイヌの視点からクジラ利用文化を捉えていることが特徴的である。アイヌ民族によるクジラ利用文化を過去のものとして考えるのではなく、アイヌ文化の復活・振興という最近の変化の中で、クジラとの関わりを再確認するアイヌの人々の努力に目をむけ、クジラ利用文化という伝統が現在アイヌ民族の一員として生きる上でのアイデンティティーの一要因となっている事に注目している。

上記の文献の他、北海道各地の漁業や捕鯨の歴史を記述する中でアイヌのクジラ利用に触れている文献が多く見られる。その中でも多くのページをさいてアイヌとクジラの間を詳細に語っているのが「雄武町の歴史」(1962)である。著者はアイヌの先人達の捕鯨と寄りクジラに関して、非常な危険を伴う捕鯨は地形的に恵まれた地域でのみ行われたと考えるのが自然であろうと述べている。落合(1992)は函館地方の捕鯨の歴史を明らかにする論文の中で、名取の「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」を引用している。1997年に出版された『北海道の自然と暮らし』(関、他)では、アイヌ民族の生活を説明する中で、クジラを捕るために用いられたキテなどを紹介し、「長万部のアイヌの人々はクジラ猟のときには、このキテにトリカブトの毒を塗っていたことが報告されている」(1997:143)としている。この記述の根拠になったのは前述の名取の論文ではないかと思われる。

北海道各地の町史・市史にはその地域の歴史の一部として、アイヌ民族の歴史が紹介されている。その中で特にクジラとの関わりが深い地域では、その地域のアイヌの人々がクジラをどのように獲り、利用していたかを記述している。これらの町史・市史の中で興味深いのは『新紋別市史』（1979）であり、アイヌが槍でつついてクジラを岸まで寄せてきた「寄せクジラ漁」が行われたと記述している。これは積極的に大海へ出て行く捕鯨とは異なり、沿岸で弱ってとどまっているクジラを岸へ引き上げる作業を指していると思われるが、寄りクジラ利用より積極的なニュアンスをもつ記述である。しかしこの種の漁法に関する資料は少ないことから、実態を知るには今後のさらなる検証が必要である。

アイヌ民族のクジラ利用文化に関する研究は名取と更科による基盤研究に始まり、渡辺、秋道、岩崎・野本などにより、最近新たな見直しがなされている。さらに近年の地域史研究の成果により、その全体像がかすかながら見えつつある。アイヌ民族によるクジラ利用文化の歴史をさらに詳細に知るには、今後の地道な研究が必要とされる。

クジラにまつわるアイヌ語地名

アイヌの人々の生活にクジラが浸透していた事実を明白に記録しているのが北海道の各地に残されたクジラに関わる地名である。山田秀三(1984)が書いた「北海道の地名」にはフンベ（アイヌ語でクジラ）という地名が数々あげられている。十勝川と利別川の昔の合流点にあるフンベ山は山の形がクジラに似ていることから、このように呼ばれるようになった。日高の広尾川から1キロ程入った所にフンベ・オマ・ナイと呼ばれる地域があるが、ここにはフンベの滝という地名も残されている。山田はこれらの地名は海岸にクジラが上がったところの川という意味だろうと書いている。フンベオマナイという地名は北海道各地にあり、紋別などのオホーツク海側のアイヌ集落にも見られる(伊藤 1978)。様似町にはフンベエトと呼ばれる岩山があり、山田はその形がクジラに似ていると説明している。同じ

様似町のフンベエト岬の近くの川でウンベと呼ばれるところがある。このウンベ川については山田の調査の他に、北海道教育委員会(1989)が行った聞き取り調査でも、その地名の由来が明らかになっている。調査に協力した古老が以下のように説明している。

様似を何回も(クジラが)寄ったっていったよ。うちのまごばあさんはな。したから、あのウンベっていうところはな、そのフンベがあがるところなんだってな。それでウンベ、ウンベって言うようになったと。
(様似, アイヌ古老)

登別にはフンベ山、昔はクジラの頭を意味するフンベ・サパという地名がある。また虻田町の海岸のチャランケ岩は昔クジラがあがった時に、そのクジラを有珠のアイヌが取るか虻田のアイヌが取るかでチャランケ(おやおやけに議論すること)した事から、その名前がつけられたと言われている(山田 1984)。更科源蔵(1976)は太平洋からオホーツク海岸にかけて各地にみられるオタフンベという地名について触れている。オタフンベは「砂クジラ」という意味を持ち、そこには夜の間に砂を盛り上げてクジラの形をつくり、そこに魚をはさんでおくとカラスが集まってき、それを寄りクジラだと思った敵が砂クジラに駆け寄るところを撃ち、敵を全滅させたという伝説がある。またフンベシュマという地名が室蘭にある。その沖にはクジラの形をした岩があり、それを寄りクジラだと思って待ったアイヌが、ついにクジラが寄ってこないで餓死してしまったという言い伝えがあると紹介している。

白老町にはオソロコツ(尻の窪み)とイマニツ(それを焼く串)という地名がある。これらの地名のいわれは、昔アイヌの文化神が海岸でクジラの肉をよもぎの串に刺して焼いていたら、パチンと音がしてその串が折れた。文化神が驚いて尻餅をついた跡がオソロコツで、折れた串が海中の岩になったという(山田 1984)。クジラにまつわる地名は海岸などのクジラと直接的な関わりを持った地域に限らず、内陸にも見られる。平取町二風

谷地区のはずれにフンペセトゥル（クジラの背中）と呼ばれる山があり、その山は一定の角度から見るとまるでクジラの背中のように見えることからその名が付けられたと思われる（岩崎聞き取り 1997）。このことから海岸から離れたアイヌの集落にもクジラが流通し、山の名称として付けられる程に親しみのあるものであったことが解る。二風谷の地域でアイヌの人々の生活を記録したバチェラー（1925）がアイヌはクジラ肉が好きであると書き残していることから、クジラ流通の範囲がこの地域まで及んでいた事が解る。

アイヌの先人達の生活にクジラが深く関わっていた事を示す記録として地名は重要である。ここではその中の数例に限って紹介したが、その他北海道各地にアイヌ民族とクジラの関わりを印す地名がある。これらの地名は今なお、その地域で生活する人々に長い時間を超えて続くクジラとアイヌ民族とのつながりを伝えている。

クジラ利用文化の歴史的記録

北海道に住む人々がクジラ資源を利用してきたことを示唆する考古学資料は古く縄文時代にさかのぼることが出来る。縄文時代の遺跡とされる東釧路遺跡からイルカの頭蓋を放射状に並べた宗教的儀礼を思わせる遺物や大量のイルカの頭蓋が積み上げられて発掘されている（西本 1985）。このことからこの時代にすでにイルカが人の生活に深く関わり、食料としてのみならず、人々の精神生活にも深く関わっていた事がわかる。この種の考古学資料は北海道の各地で発見されていることから、秋道（1994）はこれらの考古学資料から、「クジラ、イルカ、シャチ、などの海獣を捕獲して利用する文化は、北海道のなかでは確実に縄文時代から存在する」（1994：137）としている。

数々の考古学資料の中でも有名なものが根室市弁天島貝塚から発掘された針入れである（大井 1982）。この針入れと見られる鳥骨製容器には、大型の海獣が船に乗った数名の人と長い綱でつながれている様子が描かれて

いる。しかしこの絵がクジラの捕獲の様子を示しているかどうか、またこれらの人々がアイヌ民族の祖先であったかどうかは研究者の間で合意に至っていない。これが捕鯨の様子であり、この捕鯨に従事した人々はアイヌの祖先にあたる人々であろうとする意見から(秋道 1994)、アイヌ民族の祖先にあたる察文文化人の時代と重複して住んでいたオホーツク人の捕鯨の様子であるとする意見(大井 1982)などがあり、アイヌ民族の先祖が捕鯨を行ったとする積極的な証拠としては考えられていない。

アイヌ民族とクジラの関わりが文献として残っているのは、17世紀から近世にかけてであり、アイヌ民族がクジラ資源を利用する様子が、その当時北海道を探検した人々の記録の中に見られる。1643年にオランダから北海道へ金・銀を求めてやってきたフリースの航海記録によると、アッケスイ(厚岸)地域のアイヌの人々の生活を描写する中に以下のような記述があると指摘している。

彼ら(アイヌ)の食料と栄養物は魚、クジラの脂肪、魚油、野草・アッケスイには豊富にある赤いバラの実などである。

(北構 1983:146)

(アイヌ)男子は魚油、クジラの脂肪、燻製のクジラの舌、各種の毛皮、および鳥の羽根を日本の住民と交易する。

(同:147)

さらにフリースの航海記には「原住民は他の場所と同様に、多くのクジラをとることを知っていた」(同:152)と記述されている。これらの記述は当時のアイヌの人々がクジラを捕獲する技術を持ち、食料や交易品としてクジラを利用していた事を示唆している。

渡部(1992)は1712年、薩摩の船の船員の聞き取り調査をもとにした松田伝十郎の記録と、1808年の兒山紀成の『蝦夷日記』を引用して、アイヌ民族が寄りクジラを豊富に得ていた事を明らかにし、エトロフでは年間5

本から 10 本のクジラが寄りついた事例を紹介している。また同時代の記録として 1798 年の武藤勘蔵の宗谷での観察から、その地域ではクジラを捕る道具が無かった事やまた最上徳内の『渡島筆記』中では捕鯨が伝承の中に現われることから、そのアイヌの人々の日常の知識の中に捕鯨が存在した可能性を述べている（渡部 1993）。更科源蔵（1968）はアイヌの間に積極的な捕鯨があったことを示唆する文献として大内余庵の『東蝦夷夜話』を引用している。そのにはアイヌの人々が船に乗り、クジラの背に乗りかけて毒箭を持ってそれを射るという記述がある。

函館地域の古い記録にもクジラに関わる記述が多く見られ、落合（1992）はそれらの資料をまとめているが、その中でも 1708 年の『福山秘府』1779 年の『逢坂氏日記』にはアイヌの人々が寄りクジラを利用していた事が記されている事を報告している。奥山（1966）はアイヌの間に伝統的に漁猟区制度があったことを記述する中で、1809 年の『衛刀魯府志』に寄りクジラがあった場合は領の長へ報告して、その指示のもとで分配する慣習があったことを明らかにしている。さらに 1800 年代に北海道を探検した松浦武四郎の『蝦夷日誌』（吉田 1962）には、クジラに関する記述が各所に見られる。その多くが北海道沿岸にクジラが多く回遊している状況を観察しているもの、また各地に見られるクジラに関わる地名に関する記述である。しかし道南地域に関しては、毒を用いた捕鯨によって打ち上がったクジラの様子や、それを食べて死んだ事故に関する記述などがあり、この地域の記述は他の地域とは異なった特徴を見せている。

オホーツク沿岸地域のアイヌの人々によるクジラ利用について記述している文献には、クジラが松前藩の重要な産物として流通するようになると、寄りクジラの権利を規制する掟が布達され、アイヌの人々は寄りクジラを発見した場合に町奉行所に報告する義務が課せられるようになったと記されている（雄武町 1962）。つまりこれまでのようにアイヌの人々がクジラを利用することは処罰の対象となり、アイヌ民族のクジラ利用は幕府に管理されるようになっていくのである。このような管理体制は場所の管理下におかれるアイヌの集落に広くおよび、オホーツク海側のアイヌ集落でも

同様に寄りクジラの配分が幕府によって決められることとなっていく。さらにこの地域の場所請負制度はアイヌの労働力搾取に大きく偏り、その結果アイヌの人々は生業を失い、漁労や狩猟の自主性を失っていくこととなった（奥山 1966）。

安政4年(1857年)モンヘツ(紋別)場所詰同心の公務日記(小川 1998)には、寄りクジラあったことが報告され、それを役人が見分に出かけ、後にクジラの解体作業がおこなわれるという記述がある。この一年間の間に2回の寄りクジラが記録されていることから、その当時もオホーツク海のクジラ資源が豊富であったことが伺われる。クジラは解体後にその3分の1は上納され、発見者であるアイヌには3分の1が渡されると記録されている(小川 1999)。新紋別市史(紋別市 1979)にも同様の記述がみられ、寛政年間(1789年-1800年)の記録である『蝦夷嶋奇観』を引用して当時のアイヌが多数いるクジラを捕ることがなかったが、流水で傷を負ったクジラなどを船を出して引き寄せてきて利用していた様子を紹介している。またクジラの一部は上納品として函館に送られ、また「御用鯨」として塩切クジラ肉を箱詰めにして送った事を記述している。

この当時北海道の沿岸にはアメリカなどの外国の捕鯨船が操業をしており、安政3年(1856年)にはアメリカ捕鯨船の「ボンブランズ銃」と思われる鉄製の銚が紋別に漂着した記録がある(小川 1999)。同時に幕府は北方警備のために北海道に捕鯨基地を置く計画を進め、一方函館奉行所も捕鯨に強い関心を持ち、千葉の醍醐組や中浜万次郎による捕鯨の試みが始まることとなる(落合 1992)。千葉県安房郡勝山浦で捕鯨を始め「関東における捕鯨の祖」と言われた醍醐新兵衛の代々の偉業を記録した「醍醐新兵衛」(福山 1943)によると、7代目定継(さだつぐ)は西洋捕鯨を未開の地、北海道ではじめようと試みたとの記録がある。それにはいくつかの理由があり、一つは外国の捕鯨船による捕鯨活動によって、千葉の海域のクジラ資源が減少してきた事、さらに定継が何度となく目にした西洋の捕鯨技術を日本に導入したいというものであった。定継は2度北海道へ来るが、その2度目の旅は安政3年(1856年)に始まり、北海道の南岸から東岸に

かけて周り、その当時のアイヌの捕鯨を観察している。定継はその様子を「突棒捕鯨」と描写している。

蝦夷人の突棒捕鯨の幼稚さに比べて、ずっと進歩した洋式捕鯨の実施を見る日があれば、この地においてのこの事業は驚くほどの成果をえるものと、定継は自ら心を励ました。

（福山 1943：112）

この時期の記録として『蝦夷土産』（安政4年）には、北海道の海にはクジラが多いがアイヌはカムイと呼んでそれを捕獲しないが、シャチなどに追われたクジラが浜にあがると、それを食料としたり、油をとったと記述している。さらにクジラ資源が豊富であることから捕鯨を始めると有益である事も述べている（阿部 1984）。1855年から後幕領期に江戸幕府は改めて捕鯨業に強い関心を示し、アイヌのクジラ漁に注目した（田端 1990）。当時「鯨漁の任」が松浦武四郎とともにクンヌイに赴き、その地の古老にアイヌのクジラ漁について聞いたことが『戊午東西蝦夷山川取調日誌』（1858）に記録されている。その記録によると、そのアイヌ古老は50から60年前頃に、毒を仕掛けた矢じりをつけた矢を大勢のアイヌと一緒にクジラに向かって射り、後にそのクジラが浜に流れ着くのを待つという漁を行っていたという。

北海道における新しい捕鯨の時代が近づいてきた明治19年（1886年）には石川県の斎藤知一が捕鯨業を始めようと羽幌・増毛へやってきた（中村 1985）。斎藤知一は北海道において網を用いてクジラを捕獲する方法を試みるが、思うように成果が上がらない事に加えて地元の漁師の反対を受け、ついに明治21年（1888年）には、ラッコ・オットセイ猟を本業とする大日本帝国水産会社に吸収された。その後、1912年のノルウェー式捕鯨法の導入によって北海道は近代商業捕鯨の時代を迎えた。

斎藤知一が羽幌地方で網取り捕鯨を試みている頃、探検家サベージ ランダー（Savage Landor）が1890年に英国から単身で北海道に来てアイヌ

集落を訪ねて歩いて、その当時の様子を記録に残している (Landor 1893)。ランダーは海岸にクジラの骨が多くあるのを記録し、特にポロナイから宗谷岬にかけての海辺の砂浜には数多くのクジラの骨が見られたと記述している。名取 (1940, 1974) の「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」で記録されている古老の話では、30年前に1頭と50年前に1頭のクジラを捕獲してると言うことであり、この聞き取りから推察すると、ランダーはアイヌ民族とクジラの関わりの転換期にアイヌ集落を訪問し、海岸のクジラの骨の山を目にしたことになる。それから間もなく、アイヌ捕鯨が終焉をむかえ、その後に近代商業捕鯨の時代が始まったことになる。

アイヌ捕鯨の終わりを決定的にしたのは明治4年(1871年)の毒を用いた狩猟の禁止である(高倉 1972)。この禁止令によりクマ猟やシカ猟と同様に、アイヌの人々が巨大なクジラを得るために、最も効果的な方法であったトリカブト毒を失った。一般的には名取の記録にあるアイヌ古老がクジラを捕った頃に、アイヌ民族が積極的にクジラを追った時代は終わったと考えられている(渡部 1992, 秋道 1994, 岩崎・野本・藤島 2000)。その後アイヌ民族のクジラ利用は今世紀に入って寄りクジラという形で継続され、また地元の捕鯨会社から手に入れたクジラ肉や脂肪の利用は続いた。現在でも一部の地域のアイヌ古老たちが、子供の頃の記憶としてクジラに依存した日常を思い起こす事からも、北海道の特定の地域では最近までアイヌ民族のクジラ利用文化が継承されてきたと言える(北海道教育委員会 1968-1998, 岩崎・野本 1999, 岩崎・野本・藤島 2000)。

アイヌ捕鯨と寄りクジラ利用

アイヌ民族は果たしてどのような方法でクジラを得ていたのだろうか。文献と聞き取りから得た資料を総合してみると、アイヌの人々がクジラを得る方法として3つの方法があった。その中でも最も知られているのが寄りクジラの利用であり、次に名取によってその記録が残されているキテを用いたクジラ漁である。三番目に、毒を塗った槍を用いたクジラ漁である

が、この方法は古い文献や更科の記録によって明らかである。

一つ目の方法はシャチに追われたり、あるいは何らかの理由で岸に打ち上がるクジラを沖の神からの贈り物としていただく、一般的に言われている「寄りクジラ」である。しかし毒を用いてクジラを捕獲していた時代には、毒を塗った銚や槍をクジラに打ち込むことにより、後にクジラが浜に打ちあがるという「寄せクジラ漁」や、流水などに挟まれたクジラを槍などを用いて浜に寄せてくるという方法も用いられていた（詳細は 17－18 頁参照）。また紋別地方のアイヌ古老が祖母から聞いた話しの中に、現在の紋別市真砂町あたりでクジラを捕っている様子が出てくことや、近海に泊まって離れないクジラを舟で出て行き槍をついて岸に寄せた事を子供の頃の記憶として覚えているアイヌ古老がいる（岩崎聞き取り 1998）ことなどから、「寄りクジラ」は単に打ち上げられたクジラを利用しただけではなく、条件が良い地域ではより積極的ないわゆる「寄せクジラ漁」が行われていたと考えられる。渡部（1994 a）は北東アジア地域の少数民族による海獣狩猟を対比している論文の中で、コディアク島で見られるトリカブト毒を用いて投げ槍を用いた狩猟方法や、それに類似した方法と考えられるカムチャッカ半島南部のイテリメンの捕鯨などを紹介している。これらの例からも、北海道のアイヌ民族が同様の漁を行ったと考えるのが自然である。

寄りクジラの利用は北海道の各地で行われたと考えられる。さらに寄りクジラの利用は場所請負制のもとで、幕府の厳しい管理を受けながらも継続され、近年に至り、寄りクジラの頻度は少なくなるものの現在のアイヌ古老の記憶に残る時代まで継続されている。最近の聞き取り調査（北海道教育委員会 1992, 1995, 1998）では、寄りクジラの記憶を語る古老の話しが複数紹介されている。

クジラが上がることがある。春先、海の氷にはさまって岸に上がった。その時はフンベの神にお礼のカムイノミをした。解体を手伝いに行くと分けてもらえた。人背負い分もらえた。

(釧路, アイヌ古老)

昭和26年2月、白糠から知らせを告げる人が来て、クジラがあがったことを知らせてきた。私の嫁いだ先の義理の母が白糠まで行って、大きな荷を背負って替えて来た。クジラの油をもらったのだ。

(幕別, アイヌ古老)

常呂で、父が競馬に出場しに行った時、あるじいさんから浜にクジラが上がった、ということを知った。父はじいさんの大事にしていた刀(エムシ)を勝手に持ち出してクジラの肉を夜、切り取りに行った。…省略…

(美幌, アイヌ古老)

藤村(1976)の記録にも白老地方の寄りクジラの状況が記述されている。

クジラは1949年6月8日にレプンカムイ(シャチ)2頭に追われて、逃げ場を失って白老の浜へ乗り上げた。浜辺でばたついているうちに横波を受けてどうすることもできないでいた。沖ではレプンカムイは獲物を横取りされたと思っているのか知れないけどキーキーと泣いて海上をボンボン跳ねていた。クジラは長さ3間もあったが、それでも赤子だという。

(白老, アイヌ古老)

1986年に白老で行われた聞き取り調査で明治31年(1898年)から大正12年(1923年)の間に生まれた古老たちが白老郊外でのクジラやシャチとの関わりを語っている(アイヌ博物館 1985)。

クジラは漁で捕るというよりは、比較的偶然に捕れたりすることがしばしばあった。シャチに追われてあがったらしい。2トンくらいのが

戦後に捕れたことがあった。年寄りが沖の神に礼拝し、そのクジラは解体された。その後、浜をきれいにするといった意味のカムイノミを行った。クジラはまず捕るという気で捕るといったことはあまりない。キテはカジキマグロのを使っていた。

（白老，アイヌ古老）

この聞き取りで明らかになったことは、この当時すでにアイヌは寄りクジラを利用する権利を失っており、クジラが浜に上がると、その地域の漁業権を持っている漁業者が優先的にクジラを得る権利を主張し、伝統的なアイヌの権利は認められなかった。

オホーツク海側の紋別にも最後と思われる寄りクジラを記憶している古老がいる。それは約 60 年程前の出来事だった（岩崎聞き取り 1998）。

私が 4－5 歳の頃だったか、紋別の浜に流水に挟まったクジラが寄ってきて、部落の人達 20 人くらいでロープにつながって、手には竿の先にかぎのついた 10 尺か 2 尺くらいの「さぎり」を持って、それで（氷を）つついて安全を確かめて渡って、クジラを引き上げてきた事を記憶している。元紋別の流水館のあたりです。……中略……皆が出かけていったのはクジラの鳴き声がしたからだと思うので、そのクジラはいきていたのではないかな。……中略……その後にシャチも上がったことを記憶してる。それも食べたね。

（紋別，アイヌ古老）

第二の方法である離頭鉈を用いた捕鯨の詳細は「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」（名取 1940, 1974）に記録されている。名取によると、この地域のアイヌの人々は沖漁に出る際に、キテと呼ばれる鉈先と柄と綱からなる手鉈を積み、クジラが近づいてくるとトリカブトの毒を塗った鉈を打ちこむ。鉈先がクジラに刺さると柄が離れ、綱をたぐりよせることにより獲物を引き寄せることが出来る。このような手鉈が何本も用いられ、次第に毒が効

いてクジラが弱ってくるのを待つという捕獲方法である。しかしこの方法でクジラを捕獲する事が頻繁にあった訳ではなく、名取が聞き取りを行った古老は30年前に一頭と50年前に一頭のミンククジラを捕ったと記録されている。この記録に残っているアイヌによる最後の捕鯨は約100年前のことである。以下、古老の話を要約する。

ある日、長万部で午前9時頃、魚をとっているさいにコイワシクジラ（ミンククジラ）を発見。最初にキテを打ち込む。それから1時間後、クジラが浮き上がってきたときに2番鉋を打ち込む。クジラがまた水中に沈む。1時間くらいしてから、また浮上したところを3番鉋を射る。そのままクジラに引きずられて悪戦苦闘する。日が暮れてきたので、浜の人々に応援を頼み、さらに10数隻の船が参加してクジラの鉋を打ち込む。……クジラが浜にあがると、アイヌの古老はイナウを立てて、クジラのいる横にゴザをしいて神に祈りをささげた。

(1974: 98-101 筆者要約)

名取はこの当時捕鯨に使われたキテと呼ばれる鉋について、鉋がクジラの体に刺さると鉋先が柄から離れ、回転してクジラの体に残る仕組みであり、巨大なクジラを捕獲するためには鉋先に毒を塗り、その効果を高めたと記録している。更科源蔵(1955)はキテを用いたクジラ漁に関して長万部の古老に聞いた話を調査ノートに残している。

ブシ（トリカブト）に陸の獣の膽汁を入れるとクジラは陸へ陸へと寄りたがる。鴉や狐の膽汁を入れるとよい。初めブシのついたキテをなげる。なげるときは op kesi の又になったところに鉋を二本かけてなげるのだ。キテをつけると着物などを竿の先につけて合図すると、あたりにいる船は応援にかけつけて、それぞれキテをうつ。クジラのキテはそれぞれ二挺くらいずつ持ってあるくのだ。クジラは苦しがつて水にくぐったり出たりするうちに、キテの紐がひとかたまりになって

しまう。クジラが弱って来たら、近寄って ai oppu で突くのだ。

（長万部，アイヌ古老）

第三の捕鯨方法として、アイヌの人々はトリカブトを鴉や狐の胆汁と混ぜて竹槍につめてクジラに投げつけるという方法を用いてクジラを捕った（更科 1968, 76）。この漁法を詳しく説明している文献は少ない。その中でも更科源蔵は昭和 30 年に八雲に住むアイヌの古老に聞き取りをしている記録は以下のように詳細（更科 1955）な説明がある。

クジラをとるには siruku op といって、山竹の親格位のもの一尺位に切って先を尖らして、その竹筒の中にヤタマキナ（ぶつつける草の意で、実がねばねばしてくさい実）とサランベ川の石の下にいる黒い…不明…のようなのや、マグロの膽汁（胆汁）などをシルクに 7 種類位入れて chi poppu（煮て）、それを竹いっぱいにつめてキテにし、竹の筒にはイトッパ（八雲では（二本線の印）をつけて、普通のオプにつけてなげつけ、当たるとシルクの入った竹のところだけ折れて、身体の中に残り、肉にささると何処かに行って倒れて寄るから、解剖してみるとイトッパで何処の部落の者のシルクで倒れたかが解るので、そこから知らせはくるのだ。クジラの脂肪が 7－8 寸あるから、脂肪層でシルクが止まると効かないが、肉に達すると効く。普通のキテでは捕らないものだ。シルクは江差、……不明……方面にとりに旧の盆の行く。

（八雲，アイヌ古老）

更科（1968）は同様の漁法を合理的なクジラ漁とし、毒が効いてクジラが漂着すると、それを発見した一が、竹槍に印されている家紋から誰が射ったものであるかを判断して、その人の所に連絡したと説明している。この種の捕鯨に関する文献は少ないが田端は『戊午東西蝦夷山川取調誌』を参考として、安政年代（1854－59 年）のころに函館地方で行われていた寄せ

クジラ漁を説明している。

…長さ一丈程の弓、長さ三から四尺の矢を作り、きせるの吸口を割って作ったやじりに毒を仕掛けて、大勢でクジラを射る漁をやっていた、朝のうちに毒矢をあてることが出来れば、夕方には落命して、翌朝には必ずこの辺の浜に流れ着いていたというのであった…

(田端 1990:127)

アイヌ民族が「寄りクジラ」という消極的な方法だけに頼っていたのではなく、毒の使用によりクジラを寄せるという方法も用いた事はいくつかの文献により明らかであるが、この方法がどの地域まで広がっていたのか、またどのような頻度で行われたかは明らかでない。明治期に毒の使用が禁止されたことにより、アイヌの人々が積極的にクジラを捕獲することが困難になった。地域によっては、それよりもかなり早い時期に、アイヌ民族がクジラを積極的に捕獲することがなくなっていたと考えられている。さらに明治期にはすでに北海道の近海でアメリカの捕鯨船が捕鯨を行っていた(田端 1990)などの条件がかさなり、アイヌ民族による捕鯨は途絶え、「寄りクジラ」のみが近年の記録に残っているものと考えられる。

アイヌ民族によるクジラ利用方法

クジラを捕ってからアイヌの人々がどのようにクジラを解体したかを説明する文献はほとんど見つからない。筆者が唯一探し当てたのが、新谷行の「コタンに生きる人々」(1979)の中で著者と釧路の山本多助エカシとの会話の中にクジラの保存方法についての説明があるのみである。

「わしらアイヌは、ちゃんと食べ物を保存した。みんな自然の法則にしたがってな……」

「ほう、それはどんなふうにしたんですか？」

「クジラを獲るとな、波打ち際に大きな穴をほるのだ。そこへクジラを埋めるんだが、それがちゃんと海水がしみ込んでくるくらいの深さに掘る。そうすれば、海水でクジラの肉も腐ることはない。アイヌにはアイヌのやり方がちゃんとあるんだ。」

(1979：167)

この文脈では捕ったクジラなのか寄りクジラなのかは明らかではないが、海水を利用してクジラの保存と解体作業中の汚水処理を同時に行う知識は、クジラを解体する経験を十分に重ねて得られる知識であると言える。つまり当時のアイヌの人々はクジラ解体を独自の方法で行っていた事が解る。アイヌ民族の伝統的なクジラの解体の方法やクジラの各部の配分を説明する資料などはなく、それを記憶する古老も今はいない。しかし多くの文献で、クジラは集落に共有のものとして集落全体に配分される習慣があったことを明らかにしている(雄武町 1962, 名取 1940, 1974)。またクジラの分配は集落内にとどまらず、他の集落の親戚や友人などにも分配された。アイヌの古老達が昔を思い出しながら、クジラをあげたり、もらったり、他の物と交換した記憶を語ってくれた。

私は山のアイヌだから、直接クジラに関わった記憶が無い。しかし親戚で浜に嫁にいった人がクジラをひとかかえ持ってきてくれたことは記憶している。

(岩崎聞き取り 1995)

寄りクジラでクジラが手に入ると、冷蔵庫がある訳でないもんだから、皆で分けて、他のところへ持って行って、他の物と交換したりした。

(岩崎聞き取り 2000)

子供の頃クジラが岸に上がると、肉と脂をもらって母親が少し肉のついた脂の部分に塩をつけて、屋根の上に乾してベーコンのようなもの

を作ったね。それを畑をしている人の所へ持って行って野菜と交換したのを覚えている。父親と汽車で行って、帰りは椅子の下からはみ出るくらい米や野菜をもらって帰って来た。

(岩崎聞き取り 1998)

アイヌ民族はクジラがもたらす豊かな資源を食料や日用品として充分に活用した。和人との交易品や幕府への上納品としてクジラが利用されていた時代には「鯨油」や「塩鯨」の他に「貝鯨」や「石焼鯨」と呼ばれるクジラ産物が頻繁に文献に登場する。斜里漁業史(1979)によると、これらは保存用に加工されたクジラであり、アイヌの人々は海岸で焚き火をして、熱した石の上でクジラを焼いて作ったとされている。さらにクジラの鬚は当時のアイヌの船であるイタオマチップを作る際に、板を接ぎ合わせる綴じ紐として不可欠だった(羽原 1939)。

クジラの需要は時代と共に変化し、明治の頃にはクジラの利用法も変化していた。名取(1940, 1974)の記録にはクジラ肉を大きく切り、海水で茹でて後に塩で味付けするという食料としての利用法の他に、鯨油をホタテ貝に入れて燈油として使ったり、食べ物を煮るだしとして使った。また一部の地方では食べ物を鯨油で炒ることもあった。下顎の骨はキテの刃を支える部分に使い(萱野 1978)、その他の骨は製糖会社が持っていった。鬚は手釣のハネゴや網針、ボタンなどにも使うことができた。腱は鮭皮の靴やカンジキなどに使い、陰茎は婦人病の薬となった。更科・更科(1976)はクジラの筋の加工過程を説明している。

クジラの背筋は一ヶ月ほど沼につけておいて、それを乾かし堅くなったのを槌で叩いて細かく裂き、それを弓の弦などに用いた。これはツルウメモドキなどの植物繊維のように濡れたり乾いたりするたびに伸び縮みすることがないので、とくに仕掛け弓の弦にするのに大変よいものであった。

(更科・更科 1976: 422)

これらのクジラ産物は一次的な利用の他に、他の集落へ分配したり、他の産物と交換するという二次的な利用も重要であり、集落間の人々の結びつきを強めた事を忘れてはならない。

アイヌの人々はクジラを好んで食べたという記述が多くある（バチェラー 1925, 金田一 1961）。バチェラーはアイヌの人々が特に好んで食べる物として鮭、鱒、鮫、鮪、クジラ、熊、鹿、馬、牛とあげている。また北海道各地のアイヌ古老の聞き取りをまとめた報告書（北海道教育委員会 1981-1998）の中でも、アイヌの人々は鹿、熊が最も重要としながらも、クジラが食料として日常の生活に溶け込んでいたことが明らかになっている。金田一（1961）はアイヌの人々はクジラを「沖の翁（レブン エカシ）」と呼び、海岸へ魚を寄せる神として崇拝したが、浜へ寄り上がる事があれば、喜んで食べたと記録している。最近の聞き取り調査では古老達が昔を懐かしんで、クジラの調理方法を語っている。

油は流しの涼しいところで保存した。いつも数種類の油があった。クマ油、馬油、鯨油のほか、牛の油もあった。……中略……油の入っていない食事というのは記憶にはい。

（北海道教育委員会 1995 幕別，アイヌ古老）

クジラの油をもらったのだ。その油はイモを煮たのにかけたり、野菜をいためるのに、毎日熱でとかして使ったが、2年ももった。やや癖のある味だった。

（同上，幕別，アイヌ古老）

解体を手伝いに行くと分けてもらえた。一背負い分もらえた。塩ゆでにしておやつ代わりにしたり、油も採った。油はビンに入れた。……中略……油は白身の部分を鍋でゆでて、表面に浮いた油を吹き寄せてしゃくしですくうか、鍋が小さい時は「べんばち」という片口のついたどんぶりに落とした。肉は腹から下（下半身）がおいしい。ひれは

干してだしにした。

(北海道教育委員会 1992, 釧路, アイヌ古老)

クジラが手に入ると刺し身にして食べたり、切って炉の上につるしておくと自然と燻製になったし、脂は鯨油をとった後はカラカラで、それをおやつとして食べた。油はお粥のようなものにかけて食べたね。

(岩崎聞き取り 1999)

アイヌ民族は多様な方法でクジラ肉や脂を食料として利用した。上記のように脂を煮ることによりクジラ油を作り、それを用いて料理をしたり、汁ものにかけて食べたり、肉を茹でたり乾燥させて食べたり、また近年はベーコンのような加工品として食べたり、生のまま刺身としても食べたことが聞き取り調査の結果から解る。さらに筆者の最近の聞き取り調査では紋別地域のアイヌ集落では、今から50年ほど前までクジラ油やアザラシ油・魚油が生活の必需品であり、食用に用いられたほか、サンペ皿と呼ばれる平たい皿の欠けたものに芯を入れ、クジラ油を入れてランプとして用いていた。その当時を回顧するアイヌ古老は：

クジラの脂を屋根に置いておくと、脂が滴ってくる。それを入れ物に取り、布で芯を作り、欠けたサンペ皿に鯨油と芯を入れてランプにしていた。食料としても大切だったけど、鯨油や魚油は生活の核だったね。

(岩崎聞き取り 2000)

クジラとアイヌの精神世界

アイヌの人々にとって海の巨大な獲物であるクジラは豊かな富をもたらす倉のようなものあり、それを得るための精神的な準備や、クジラを得た後の感謝の表現としての儀礼は昔から行われていたであろう。しかしその

詳細を説明する文献は少なく、最も古いものとしては名取（1940, 1974）の論文のなかで「漁に関する信仰」として 10 ページに及ぶ記述が見られる。それを要約すると次のようである。

アイヌは漁に出る前にそれに関連した神々に祈ってからでたものである。まず家の中で炉に火の神へにイナウを捧げ漁の無事を祈る。その後そのイナウの一本を家の床の間に当たる右に立て、家の神に祈る。次に東窓の右側の海幸の入り口の左にいる神に豊漁を祈る。……中略……次に外で浜の幣所で第一に波打ち際の神に舟が無事に波打ち際を降りるように祈る。このカムイは 2 柱で、そのいずれにも祈る。第二に舟の降りる波の上にいる神に、無事に舟が浮かぶように祈る。第三に噴火湾を統治している神に出港の無事を祈る。第四に太平洋を守る外海の神に祈り、第五にレプンカムイであるシャチに海の幸を沢山さずけてくれるように祈る。カムイフンベは兄弟 2 柱の神なので、そのいずれにも漁がさずかるように祈る。その他、夫々の舟の部分を守る舟に宿る神々にも祈る。これらの祈りが終わったら、舟を降ろす。……中略……神々に祈りを叶えてもらえたら、お礼の祈りを必ずする。獲物の肉体は有り難く頂くが、その魂は祝って送り返す。獲物の頭部に削花を付け、海幸の神棚に置き、漁期の終わりに浜の幣所に出して、一度にカムイノミをする。4 月に一度、10 月に一度、一年に 2 回カムイノミを行う。

（名取 1974：105－112，筆者要約）

次に名取はアイヌの人々が漁の前と後に捧げた祈りを詳細に説明した後、自身が実際に参加したクジラ送りの様子を記述している。

クジラを突いた経験を持つ古老が祭主となり、フンベ（クジラ）送りが行われた。11 年前に長万部の浜に寄ったナガスクジラの頭骨を削花で清め、沖に向けて安置する。その後に幣を造り儀式が進められた。

ヌササンのイナウの配列は右からフンベがお土産として持って行くシュトイナウを3本、次にシノイナウ1本とシュトイナウを2本とまたシノイナウ1本が立つが、これらは2柱の兄弟神であるシャチの神に捧げる2本のシノイナウとそれぞれのシノイナウに従者として侍うシュノイナウが2本なのである。最後に狐の神であるハシナウカムイに対して3本のイナウを立てる。ハシナウカムイは無事にクジラの魂が父母のところに帰るように守ってくれると信じられている。祈りの言葉はレブンカムイに対しては大きいフンベをくれたことに対する感謝、フンベに向かつては客人として来てくれた事の感謝の後、このように祝って送るので、また来てくれることを願う祈りをする。またハシナウカムイにはフンベの魂が無事に帰ることができるように祈る。最後に神々が喜ぶ踊りを踊って式が終わった。

(名取 1974:112-114, 筆者要約)

名取はクジラ送りを熊送りと比較して、宗教的意味は同様であるが送られる神の位に従って、送る人の気持ちが異なりゆえに儀式にも差が出てくる事を説明している。つまりクマやシャチはクジラより位の高い神であり、送り儀礼もそれに伴って異なっている。

アイヌの人々は漁に関わるタブーを守ることによって、不確実な成果をより確実なものにする事を期待した。男が漁に出ている間は家の女達は静かにし、家から物を出してはいけないし、人に物を与えることもいけなかった(名取 1940, 1974)。更科(1968)は同様のタブーに関して、それは沖の海獣達が家族の真似をするからだと言っている。アイヌは信じていると説明している。またアイヌの人々は逆言葉の効力を信じていた事から、漁の途中で人に会ってもその人が不漁を祈いつつも逆の挨拶をすると、漁が無いなどの悪い結果になることから、誰に対しても挨拶は「授かるものなら授かるだろう。授からないものなら授からないだろう」と言ったとされている(名取 1940, 1974)。

名取の論文以外に、クジラが浜により上がった時の儀礼について記述し

ている文献は少ないが、アイヌ博物館（1985）の資料で、白老地方の第二次世界大戦以後の寄りクジラがあった時の記録の中で、その時の儀礼に簡単に触れている。その資料によると、クジラを解体した後に浜をきれいにするという意味を込めてカムイノミを行ったという。更科（1953）の聞き取り調査ノートには鵜川のアイヌ古老から聞いた話として、クジラが岸に寄りついた時にどのような事をしたかが書かれている。古老はフンベカムイノミを行い、魂を活かしてやり、新しいものになって立派に暮らしてほしいという気持ちを込めて、クジラが寄ったところにヌサを立てたと答えている。また他の調査ノートにはシャチが氷に挟まれて寄ったときには、チケイナウ（アシペノカを付けて）一つ付けて送るという記録や（更科 1953）、シャチが寄ったときは肉や脂肪をとりイナウをあげる（更科 1951）と記録されている。

上記の儀礼は過去にアイヌの人々がクジラとの関わりを深くもっていた頃に行われたものであるが、それがすべて過去のものになってしまったわけではない。余市アイヌとシャチやクジラとの関わりを表す「カムイリニ」と呼ばれる儀礼用の木製のシャチが、最近復元された（青木 1990）。余市浜はシャチに追われた鯨類が多く岸に上がったことから、沖の神であるシャチを特別に崇拝し、木製のシャチをイナウでかざり、その下にシャチがもたらすクジラ、イルカ、海豹などの海の幸を木で形どり、横一列に下げて「カймイリニ」と呼ばれるものを作った。この地域のアイヌの家では日常、家の中のシントコなどの宝物が置かれている上に吊り下げ、それに向かって祈りを捧げた。この「レプンカムイ」の伝承は昭和初期まで余市地方で伝承されてきたが、地元のアイヌの男性がこの「カムイリニ」を復元し、余市でもレプンカムイの伝承が守られてきたことを示した。

アイヌ語や民話、踊りにあらわれるクジラとの関わり

アイヌ語にはクジラの種類や部分などを表す言葉が数多くある。名取（1940, 1974）は第一にクジラをあらわす「フンベ」という言葉の語源を「フ

ム」がクジラの呼吸音であり、「フムとなるもの」という意味で「フンベ」と呼ばれていると説明している。またシャチをあらわす「カムイフンベ」という言葉の他に、クジラの種類を識別する言葉が7つあるとして、以下のように列挙している。

ノコルフンベ	(コイワシクジラ, ミンククジラ)
シノコルフンベ	(イワシクジラ)
オアシペウシ	(ナガスクジラ)
クツタルフンベ	(ナガスクジラ族)
オケクシュフンベ	(ナガスクジラ族で特に下痢をおこしやすい)
オシャカンゲフンベ	(コククジラ)
ヤキフンベ	(マッコウクジラ)

知里(1959)の「アイヌ語獣名集」には「クジラ」という項目の中にクジラに関連した言葉として24の言葉をあげている。その中には上記の鯨種をあらわす言葉の他に、クジラの脂肪(rika)やクジラの沖詞(pisotki), 山の中でフンベという言葉避けて使う言葉(heyse)などがあげられている。

アイヌ民族の間で古く伝承されてきた民話などにクジラに関わるものが多い。それらのほとんどがアイヌに富みをもたらす存在としてクジラに対する感謝の気持ちが現されている。知里(1986)は一般的に良く唄われるウポポ(普通、広間の一隅に女性のみが座って円陣を作り行器などの蓋などを叩きながら唄う)の一つとして以下のウポポを紹介している。

大きな鯨がより上がった
まあうれしい
神様が神駕にのってお出でになった

わしは大層大きな鯨だから

庭の上から
冷たい空気や風に
吹き上げられる

（知里 1986：51－52）

アイヌ古老が唄う唄にフムペカムイ イフンケ（クジラ神の子守り歌）がある（札幌テレビ 1983）。その内容はクジラの神様がアイヌの女性と結婚したくて、人間に姿を変えてやってきて、結婚したらその後にクジラを陸に上げてあげるという約束をした。アイヌの女性がその男と結婚したので、村中がたいへん幸せになったというものであり、前述のウポポと同様にクジラがアイヌに富をもたらすものであるという喜びが唄われている。

萱野茂のユーカラ集にもクジラにまつわる話しが紹介されている。「怪鳥フリと白ギツネ」の中には、フリという巨大な鳥が丸ままのクジラ一頭を抱えて飛んできて、一口食べさせて欲しいと言う白ギツネの神の願いを無視して、木の上にクジラをおいて食べようとする。それに怒った白ギツネの神がフリに呪術をかけて、クジラを横取りするという話しく出てくる（萱野 1998）。

アイヌの人々が住んでいた北海道各地にクジラの骨にまつわる話があり、興味深いことにその多くは山にクジラの骨があり、それは昔に津波によって押し上げられたのであるという種類のものである。更科（1968）は十勝の広尾町と池田町の話を紹介しているが、筆者は紋別で同様の話を聞いている。

ばあさんの曾ばあさんの時代に大津波があり、大山の麓まで水がついたことがあって、大山の麓までみんな流されてしまいました。この時司祭に使っていたと思われるクジラの骨も流されたのでしょうか。青かびの生えたクジラの骨が大山の麓にあるとという事を聞きました。……中略……なぜクジラの骨が司祭に使われたかという、兄が60年ほど前に元紋別に番屋を建てたが、ばあさんからこの付近に司祭を

行った場所があったと聞かされた。

(岩崎聞き取り 1998)

祭りなどで踊る「寄りクジラの踊り」は有名である。アイヌはこの踊りを踊ることによって、クジラが浜に上がるという望ましい結果をあらかじめ先回りして演じ、それによりそのとおりの現実が起こると信じた。この踊りの形態は地域により多少の差はあるが、踊りの持つ意味は共通して寄りクジラを得る喜びを表現している。ここに紹介するのは白老地方に伝わる「寄りクジラの踊り」である。

クジラになる人が着物をすっぽり被り、中央に横たわる。そこへ盲目の老婆をまねた人が杖をつきながら歩いてくると何かにつまずく。杖や手で確かめると、クジラであることに気がつく。老婆は大声でクジラが寄り上がったことを知らせる。知らせを聞いた村人が背負い袋を下げて寄りクジラの唄を唄いながら集まってくる。クジラを囲んで肉を背負い袋に入れていると、カラスがあっちこっちから鳴きながら集まってきた、クジラをついばもうとするが、村人に追い払われる。肉を分け終わった村人が唄を唄いながら帰って行く。カラスは残りの肉をついばみ、飛び去っていく。後にはぬけがらの着物が残る。

(岩崎聞き取り 1999)

この唄と踊りは、現在アイヌ芸能として若い世代のアイヌに継承されている。二風谷では子供たちの踊りとして遊びの要素を取り入れて受け継がれ、踊りの最後にはクジラになった人を皆で放り投げて楽しい雰囲気で行われる(岩崎聞き取り 1993)。更科(1976)は胆振や日高海岸で過去に行われたクジラ祭りの中で、クジラ踊りが踊られていたことを紹介している。

一人の人がねころんでいるところに、盲に扮した老婆が腰をまげ、杖をつきながら出て来て、あたりをさぐりさぐり寝ている人に近寄る。

するとあたりにひかえている人々が「フンペ ヤンナ プンポエー(クジラがあがった音がする)」とうたい、また、「浜の方で音がする。目の見える連中よ音がする。行ってごらんよ音がする。海藻だかクジラだか音がする。ころがっているよ音がする。」とうたいながら老婆の後につづく。そして人々が先に行こうとすると、老婆が「先に行くな、跡から来い」と押さえたり、「腹肉もらうよ」とか「のど肉もらうよ」とはやし立て、寝ている人をくすぐったり、胴上げしたりしながら「オノンノ（いいな）オノンノ（いいな）」と言う。

（更科 1976：419－20）

「クジラ踊り」は踊りの細かな部分や共に歌われる歌などが地方によって、異なっている。更科（1976）はどの地方にも共通している点として、目が見えない老婆がクジラを探すというシナリオはかつて巫女がクジラが寄りあがることを予言したことと関係があるかもしれない事を指摘している。また虻田では昔クジラがとれると、家の中でクジラ踊りを踊り、その後一人の男が上座にうつ伏せになる。その男を女達が軽く叩きながら歌を歌い、その家に男が手足を動かし始めると、「生き返った」といって、男にイナウを付けて浜辺に持って行き、頭を海に向けて置くという風習を紹介している。これは男をクジラと見立てて、クジラの魂が蘇って、村に再びたくさん肉と脂をもたらしてほしいという呪術劇である（更科1976）。

クジラ利用文化の現在的意味

1997年5月、明治期以来の「北海道旧土人保護法」に代わって「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」²（以下「アイヌ文化振興法」とする）が施行され、明治期から展開され

2 法律第52号「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及

たアイヌ同化政策が法律の上で整理された。このことは日本社会を構成しているアイヌの人々とアイヌ以外の人々のすべてにとって、新たな時代の始まりを意味している。この法律の第一条「目的」はまさに本法律のもとで作り上げるべき多文化社会を象徴的に表現している。

第一条（目的）

この法律は、アイヌの人々の誇りの源泉であるアイヌの伝統及びアイヌ文化が置かれている状況にかんがみ、アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する国民に対する知識の普及及び啓発を図るための施策を推進することにより、アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、あわせて我が国の多様な文化の発展に寄与することを目的とする。

アイヌ民族の伝統文化を復活させようとする努力は、すでに1980年代から始まっており、アイヌ語教室の普及（Anderson and Iwasaki-Goodman 2001）やサケ儀礼の復活（Iwasaki-Goodman and Nomoto 2001）などが北海道各地で始まっていた。「アイヌ文化振興法」はその流れを加速させるものであり、この法律の施行以来、北海道各地でアイヌ儀礼の復活や、伝統的シカ猟の復活、伝統的民芸・踊りを復活などの努力が目立っている。

このような新たな社会変化の中で、アイヌ民族とクジラの関わりはもはや過去のものとなってしまったのだろうか。岩崎・野本・藤島（2000）が「アイヌ民族のクジラ利用文化」の最終章で、明快にこの問題に答えている。

私達の先祖は「捕鯨」とか「寄りクジラ」というかたちでクジラを利用していた。現代に生きるアイヌとして、その事実を誇るべきアイヌの伝統文化として語っていきたい。その誇りがアイヌ民族のアイデンティティーを現時代に再生させていく拠り所となる。

並び啓発に関する法律」1997年5月14日施行

（同：16）

最近より多くのアイヌの人々が「鯨踊り」を踊り、ウポポを唄い、アイヌとクジラの関わりを語るようになった。当然ながらこれらの人々のクジラとの関わりは100年前とは異なり、このことは現在のアイヌ民族が自らの伝統文化を現代社会の中で再生・維持しようとする努力の表れである。クジラが捕れることを願って踊ったアイヌの祖先達の思いとは異なり、いま「鯨踊り」を踊るアイヌの人々は現代社会におけるアイヌ民族として自己のアイデンティティーを問いかけているのである。岩崎・野本・藤島（2000）は彫刻をする人や儀式を行うアイヌの人々に受け継がれている、シャチの家紋について説明し、シャチの紋はこれらの人々に自己の家系を証すものであると同時に、アイヌ民族の伝統を受け継ぐ者としての誇りという力強い意味を持って用いられているのであり、あるアイヌ青年の言葉を引用している。

家にあった儀礼の杯に刻まれていたレプンカムイの印を自分のマークとして活用しています。刻みを象徴するシャチに対しての思いは強く、このマークを使うことに誇りと強い責任を感じています。

（岩崎・野本・藤島 2000：16）

「アイヌ文化振興法」の施行によって、アイヌ民族伝統文化の復活がより力強く展開されるなか、昔に息づいていたクジラとアイヌ民族とのつながりを再生させ、それを新しい世代に伝えていこうとする努力が始まっている。この努力を通してアイヌの人々が自らのアイデンティティーを確立し、アイヌ民族としての誇りを回復することは、まさに「アイヌ文化振興法」が目的とするところではないだろうか。

おわりに

本論文で紹介した1600年代に始まり明治期に至る歴史的資料や近年の文献、及び聞き取り調査資料は決して十分なものではなく、今後さらに調査及び検証を必要とする。しかし以上の大まかな資料分析を通して、1600年代から明治期に至るまでのアイヌ民族によるクジラ利用文化の歴史的背景、さらに近年に至り細々と受け継がれてきたクジラ利用文化の概要が解ってきた。過去にはアイヌの人々がそれぞれの地域の条件に合わせて捕獲するなり寄りクジラを得るなりの方法でクジラを得て利用してきた。その後幕府の力が北海道各地域に及ぶにつれて、クジラの利用が制限・管理され、さらにクジラは交易品として和人へも流通するようになる。それにつれてアイヌの自由なクジラ利用が制限されていく。そのなかでも噴火湾・函館地域ではアイヌの捕鯨は継続されていくが、それは地理的好条件があったことと、さらに幕府が捕鯨を経済的・軍事的目的で推奨する意図があった事によるものと思われる。しかし明治期に毒を用いた猟が禁止されることによって、他の狩猟活動と同様にアイヌの捕鯨の伝統は絶えていった。その後、「寄りクジラ」を中心としたクジラ利用文化が継承され、地名や踊り、クジラ料理、儀礼等としてアイヌの人々に受け継がれてきた。

アイヌ民族の伝統文化の復活が進む最近の流れの中で、アイヌ民族とクジラの関わりが再生されようとしている。アイヌ民族捕鯨を求める人々が活動を始め、「クジラ祭り」と呼ばれる儀礼が白糠地方で復活し、「クジラ踊り」を踊る人々が増えている。これらの新しい変化を理解することこそが、「アイヌ文化振興法」が目指す多様な文化の発展に寄与することではないだろうか。

(謝辞)

本論文をまとめるにあたり、野本正博（アイヌ民族博物館）を始め多くの友人、共同研究者にご指導頂いたことに感謝を申し上げます。

（付記）

本論文は平成 11 年度北海学園学術研究助成一般研究（課題名「北海道における先住民族のクジラ利用文化」）による成果をまとめたものである。

参考文献

阿部正己（編）

1984 『アイヌ説（一）（二）』アイヌ資料集第 5 巻第 2 期出版 北海道出版企画センター

アイヌ文化保存対策協議会（編）

1969 『アイヌ民族誌』第一法規出版株式会社

アイヌ民族博物館

1985 「聞き取り資料」

秋道智彌

1994 『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会

Anderson, Fred and Masami Iwasaki-Goodman

2001 Language and Culture Revitalization in a Hokkaido Ainu Community. In M. G. Noguchi and S. Fotos eds. Pp.45-67. *Studies in Japanese Biligualism*. Clevedon: Multilingual Matters LTD.

青木延広

1990 「ヨイチアイヌの民俗 カムイリニについて」『北海道の文化 61』北海道文化財保護協会

バチェラー ジョン

1925 『アイヌ人とその説話』富貴堂

知里真志保

1959 『アイヌ語獣名集』北海道大学

1986 『和人は舟を食う』北海道出版企画センター

藤村久和

1976 『北海道史研究』北海道史研究会

福山順一

1943 『捕鯨界の先覚者 醍醐新兵衛』日本出版

羽原又吉

- 1939 『アイヌ社会経済史』 白揚社
北海道教育委員会
- 1981-1998 『アイヌ民俗文化財調査報告書 I - XVIII』
伊藤せいち
- 1978 『紋別と興部のアイヌ地名』 紋別郷土史研究会
Iwasaki-Goodman, Masami and Masahiro Nomoto
- 1999 The Ainu on Whales and Whaling. In W. W. Fitzhugh. Ed. pp.
222-226. *Spirit of a Northern People* Washington: National
Museum of Natural History Smithsonian Institution.
- 岩崎・グッドマン まさみ
- 1995 「聞きとり資料」
1998 〃
1999 〃
2000 〃
- 岩崎・グッドマン まさみ, 野本正博
- 2000 「アイヌ民族とクジラの関わり」『モーリー』2号:26-30 財団法人
北海道新聞野生動物基金
- 岩崎・グッドマン まさみ, 野本正博, 藤島法仁
- 2000 「アイヌ民族のクジラ利用文化」『鯨研通信』第 406 号:10-17. 財
団法人日本鯨類研究所
- Iwasaki-Goodman, Masami and Masahito Nomoto
- 2001 Revitalizing the Relationship between Ainu and Salmon:
Salmon Rituals in the Present *Senri Ethnological Studies* 59:
27-46.
- 萱野茂
- 1978 『アイヌの民具』すずさわ書房
- 萱野茂
- 1998 『萱野茂のアイヌ神話集成 1』ビクター
- 金田一京助
- 1961 『アイヌ文化志』金田一京助選集 II 三省堂
- 北構保男
- 1983 『1643 年アイヌ社会探訪記』雄山閣出版
- Landor, Savage
- 1893 *Alone with Hairy Ainu*. London: John Murray

紋別市

1979 『新紋別市史』

中村春江

1985 『北海道で鯨を捕った男』 あすなろ社

名取武光

1940 「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究』 3：137-161

1974 「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」 pp. 95-118. 『アイヌと考古学
(二)』 名取武光著作集Ⅱ 北海道出版企画センター

西本豊弘

1985 「動物学」『考古学』 11：91-95

落合治彦

1992 「函館周辺の捕鯨事情」『函館昔話 4』 pp. 50-60 函館パルス企画

小川昭一郎

1998 「モンヘツ場所詰同心の公務日記」『道都大学紀要教養部』 第 17
号：1-43

1999 「モンヘツ場所諸件書付」『道都大学紀要社会福祉部』 第 23 号：
1-63

大井晴男

1982 『シンポジウム：オホーツク文化の諸問題』 学生社

奥山亮

1966 『アイヌ衰亡史』 みやま書房

雄武町

1962 『雄武町の歴史』

札幌テレビ放送株式会社

1983 『エカシとフチ』

更科源蔵

1951-1965 「コタン探訪帳」（調査ノート）

1968 『アイヌ：歴史と民俗』 社会思想社

1973 『アイヌ文学の生活誌』 NHK ブックス

更科源蔵，更科光

1976 『コタン生物記Ⅱ』 法政大学出版局

斜里町

1979 『斜里漁業史』

関秀志，他

- 1997 『北海道の自然と暮らし』北の生活文庫第2巻 北海道
高倉新一郎
- 1972 『アイヌ政策史』三一書房
新谷行
- 1979 『コタンに生きる人びと』三一書房
田端広
- 1990 『開港と函館の産業・経済』函館史 通説編第二巻
渡部裕
- 1992 「アイヌの海獣狩猟」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第一号：
53-76
- 1993 「蝦夷地における動物名称の認識とアイヌの生業」『北海道立北方
民族 博物館研究紀要』第二号：45-58
- 1994 a 「北東アジアにおける海獣狩猟(Ⅰ)」『北海道立北方民族博物館
研究紀要』第三号：61-82
- 1994 b 「環オホーツク海の家獣狩猟文化」『環オホーツク海文化のつど
い報告書』No.2：76-82
- 1995 「北東アジアにおける海獣狩猟(Ⅱ)」『北海道立北方民族博物館研
究紀要』第四号：65-86
- 山田秀三
- 1984 『北海道の地名』北海道新聞社吉田常吉(編)
- 吉田常吉(編)
- 1962 『松浦武四郎蝦夷日誌(上・下)』時事通信社